

令和7年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 鞆ヶ谷 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

（イ）義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

（1）義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

（2）学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

（3）そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

（1）教科に関する調査（国語、算数、理科）

教科に関する調査（国語、算数、理科）

① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

（2）児童質問調査

児童質問調査

○ 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

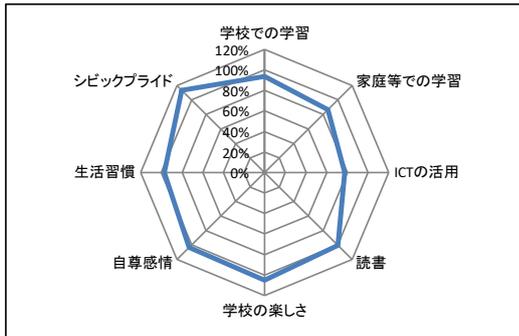
(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	「目的に応じて、文章と図表やグラフを関連付けながら、必要な情報を見つけ出す問題」において全国平均を上回る正答率だった。複数の資料の中から、自分の考えを支える根拠を素早く、正確に特定する力が育っている。国語科のみならず、全ての教科において「比較する」「分類する」といった学習を積み重ねてきた成果が見られた。一方で、学年別漢字配当に示されている漢字を文の中で正しく使うということにおいて課題が見られた。自分が書いた文章を読み直し、漢字の誤りや送り仮名の不備に自ら気付く力を高めていく。	全国平均正答率との比較
	よくできた問題	我が国の言語文化に関する事項	
	努力が必要な問題	言葉の特徴や使い方に関する事項	

算数	全体的な傾向や特徴など	データの活用の領域においては、全国平均を上回る正答率だった。複数のグラフや表から必要な数値を読み取り、目的に応じて比較・分析する力が身に付いている。一方で、図形領域において「角の大きさの理解」に課題が見られた。角の大きさを「辺の長さ」や「図形全体の見た目の大きさ」に着目することができるよう、視覚・体感的にできるような指導を積み重ねていく。	全国平均正答率との比較
	よくできた問題	データの活用（伴って変わる二つの数量）	
	努力が必要な問題	図形（角の大きさ）	

理科	全体的な傾向や特徴など	理科の平均正答率は全国平均を上回る良好な結果だった。今回の好結果は、専科指導において、日頃の授業における問題解決的な学習や、実習・観察を重視した指導の成果ではないかと捉えている。「なぜ」「どうして」という疑問をもち、自ら予想を立てて検証するプロセスを大切にできたことが、思考力・表現力の向上につながってきている。一方で、実験の方法を発見し、記述するという点に若干の課題も見られました。今後は、得られたデータをより客観的に分析していく力をさらに伸ばしていくことができる指導を継続して行っていく。	全国平均正答率との比較
	よくできた問題	「生命」を柱とする領域	
	努力が必要な問題	「エネルギー」を柱とする領域	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を100としたときの本校の割合

質問調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の強みやよさを肯定的に捉えている児童が約100%と非常に多い結果となった。家庭での温かい励ましや日々の学校生活での達成感の積み重ねによるものと考えられる。また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」との問いに対して約90%以上の児童生徒が肯定的に回答している。他者を思いやる心や、社会の一員としての自覚が育ってきている。さらに、自分自身の成長だけでなく、周囲の人々を幸せにしたい、役に立ちたいという優しい願いが、多くの子どもの心に育っている。 ・「土日など学校が休みの日の学習時間」が少ない傾向にある。平日の学習リズムを休日にもつなげられるよう、学校でも計画的な家庭学習の進め方を指導していくとともに、家庭においても、休日の生活リズムの中に、短時間でも「机に向かう時間」を設けるよう啓発していく必要がある。 ・「ICTを活用した授業」において肯定的な回答をした児童の割合が約70%に留まった。この数値を真摯に受け止め、授業内でのタブレット端末等の活用頻度を高め、子どもたちがより一層使いこなせるよう、教員の指導力向上と授業改善を加速させていく。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

算数科の授業において、一人一人の習熟度や考え方に合わせた学習を進めるため、ペアやグループなどでの話し合う場をより積極的に設定し、子どもたちの主体性を引き出し、一人一人が表現する場を設定する。また、ICTの活用については、授業内でのタブレット端末等の活用頻度を高め、子どもたちがより一層使いこなしていくことができるよう、教員の指導力向上と授業改善に努める。

② 家庭生活習慣等に関する取組

「毎日朝ご飯を食べる」「早寝早起きをする」などといった基本的な生活習慣が大変整っている。保護者が、日々子どもたちの健康管理と規則正しい生活を支えてくれているからこそその結果である。学力のさらなる定着については、休日を含めた家庭での学習習慣を身に付けていくことで、より定着していくと考える。平日に身につけたリズムを崩さないためにも、ドリルアプリ等を活用して家庭での学習習慣を定着させていくなど、家庭と連携し、家庭においても自主学習に取り組んでいくことができる環境を整えていくための意識啓発を真摯に行っていく。